
『精一杯』【掌編・サスペンス】

山田文公社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『精一杯』 【掌編・サスペンス】

【Nコード】

N0824R

【作者名】

山田文公社

【あらすじ】

状況は切迫していた、それが一体どのような問題を引き起こすか藤村拓真は想像した。藤村の想像が正しければ42時間以内に日本の人口は半分以下になる。なんとしてもそれだけは避けなければならない。

『精一杯』 作：山田文公社

状況は切迫していた、それが一体どのような問題を引き起こすか
藤村拓真は想像した。藤村の想像が正しければ42時間以内に日本
の人口は半分以下になる。なんとしてもそれだけは避けなければならない。

事件は今から遡ること16時間前、CIA（アメリカ合衆国中央情報局）から、複数名のテロリストが国内に潜入し大規模なテロを計画しているという情報が、警視庁公安部にもたらされた。CIA、公安調査庁、防衛省情報本部長、公安外事課は、前例の無い共同捜査を行い、彼らが潜伏している港付近の倉庫を突き止めた。突入した現場には、ほとんど何も残っていない中、残された幾つかの品から、生物兵器の保管が確認されたのだ。現場に残された大がかりな保冷库とクリーンベンチに残されたラットから、致死性の高い未確認のウイルスが検出されたからだ。

それが判明したのが、12時間前の事だった。それからウイルスの致死性の高さが確認され、発症から発病までの速さに加えて感染力の強さが確認されたのが、8時間前になる。

想定では潜伏期間の間に風邪の症状に似た、咳、くしゃみで感染し、広がりを見せる。しかも恐ろしい事に、空気中でもしばらく死滅せずに感染力を保ったまま38時間は媒介なしに存在できる。

その情報がアメリカ側から提供されたのが、7時間前の事である。そして行方を追っている最中にテロリスト側からの犯行声明と日本国家への要求が録画されたテープが各報道機関に送られて、放送されたのが6時間前の事だ。

そして、茨城県のとある場所で示威行動としてウイルスが散布さ

れ、住人400人あまりが感染した。これにより周辺5キロ圏内は立ち入り禁止区域に指定された。アウトブレイクのパンクから国内在住の外国人への暴行や嫌がらせ、通報などが相次ぎ警察機関の電話回線パンクした。予備的に無線へと切り替えたが、傍受の可能性も受けて仕様は控えるように通達があった。

3時間前に散布第二弾の情報を受けて捜査員が投入された所で、突然発症者が拡大した。研究機関の話ではウイルスに意図的に遺伝子操作を行われた可能性が高いとしている。想像以上の感染拡大に政府は特例法により罹患者を強制隔離するように関係各部署に通達したが、これが問題を大きくした。

しかし末端にまで十分な生物兵器の対応方法が行き渡らずに、せいぜい風邪かもしくはインフルエンザ程度の防護策しか取らずに対応に当たったために、感染者は急激に拡大した。混乱防止のための情報秘匿が仇となった。

第三弾の散布情報は1時間前に入り、公安機動課の藤村拓真^{ふじむらたくま}は犯人達の潜伏している場所へ潜入したのだった。

「どうせ待ったところで奴らは動かないさ」

小さな雑居ビルに囲まれた、ホテルの一室の前に聴診器をあてがい、なかの声を聞いていた。

「いや、一度出した声明に反してはならない」

犯行声明が出されてから応答が無い場合、少しずつウイルスを散布していく事を宣言し、事実今までその通り散布が行われた。

「なら、今回の散布で反応がなければ……良いんだな？」

そして今回が最後のウイルス散布最終日になる。

「好きにしろ」

薄い扉の向こうで地方なまりの強い言葉で会話している。彼らは捕まると口を開かないので、出来る限り捕まえずに情報を得るのが鉄則だと、藤村は聞かされていた。

テロリストが最後のウィルス散布を行うのは『道玄坂』近辺という情報だった。近辺には若者があつまるファッションビル『109』があるため、万が一ここで散布された場合、一気に拡大する恐れがある。突入して取り押さえようと藤村は無線に手をのばしたが、その手を止めて彼らの会話に集中した。

彼らの会話を聞く限りでは、まだウィルスを所持しているのは明白であるのを判断した藤村は彼らの逮捕を先送りにした。しかしその判断が事件を大きくしてしまった。

政府機関はテロには屈しないと名言していたが、事件に対する影響を鑑みてテロリストの要求を呑む方向へと変わった。しかしこれが各国から非難される要因になったうえに、要求通りに従ったにもかかわらず、ウィルスが散布されたのだ。

そして最後の散布が行われようとしている。藤村は最後の現場へと走っていた。

高層ビルの上にコートを着た男が立っていた。

「そこまでだ！」

藤村が銃を構えて警告すると、コートを着た男は両手をあげて動きを止めた。手を挙げた男の肩口が大きく揺れる。やがてそれが笑っているのだと気づいた時、男はゆっくりと振り向いて、空になった容器を逆さまにして見せた。

「神は偉大だ。そしてお前達は馬鹿だ」

そう言い男は容器を地面へと落とした。こちらが近付かないのを見て撃たないと判断した男は走りだした。警告しても止まること無かったために藤村は男の足を撃ち抜いた。駆け寄ると男は楽しそうに笑いながら、言った。

「もう、誰も助からない」

「そうだな……」

藤村は男の額を銃弾で撃ち抜いた。

「だが一人ぐらいは助けられるさ」

猛烈な寒気と咳が始め倒れた藤村は、最後の気力を振り絞り、家にいる父へ電話を入れた。

「急に電話ごめん……よく聞いてくれ」

いつもよりもゆっくりとした言葉に、いつになく父は真剣に耳を傾けてくれた。

「今から48時間……つまり2日間家から出ないでくれ」

藤村の言葉に父は「わかった」と短く答えた。

それだけ伝えて藤村は電話を切った。声は力無く声帯が震えるだけで、もう呻き声ばかりであった。体も寒気と震えで動けなくなっていた。

「一人ぐらいは助けられるさ……」

そう言い藤村は力尽きた。

ウィルスで日本の人口は三分の一減少した。実に約4200万人の死者が出る惨事となった。多くの外国人労働者が国内に移住してきた。日々は大きく変わったが、日常は変わらずに埋められた。

梅が咲く頃に、仏壇を開けた藤村の父は、手をあわせて黙礼し無くなった息子の拓真の遺影を見た。

「よくやった」

藤村の父はそう呟きながら、ゆっくりと仏壇は閉じられていった。

（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0824r/>

『精一杯』【掌編・サスペンス】

2011年2月21日04時25分発行